



始

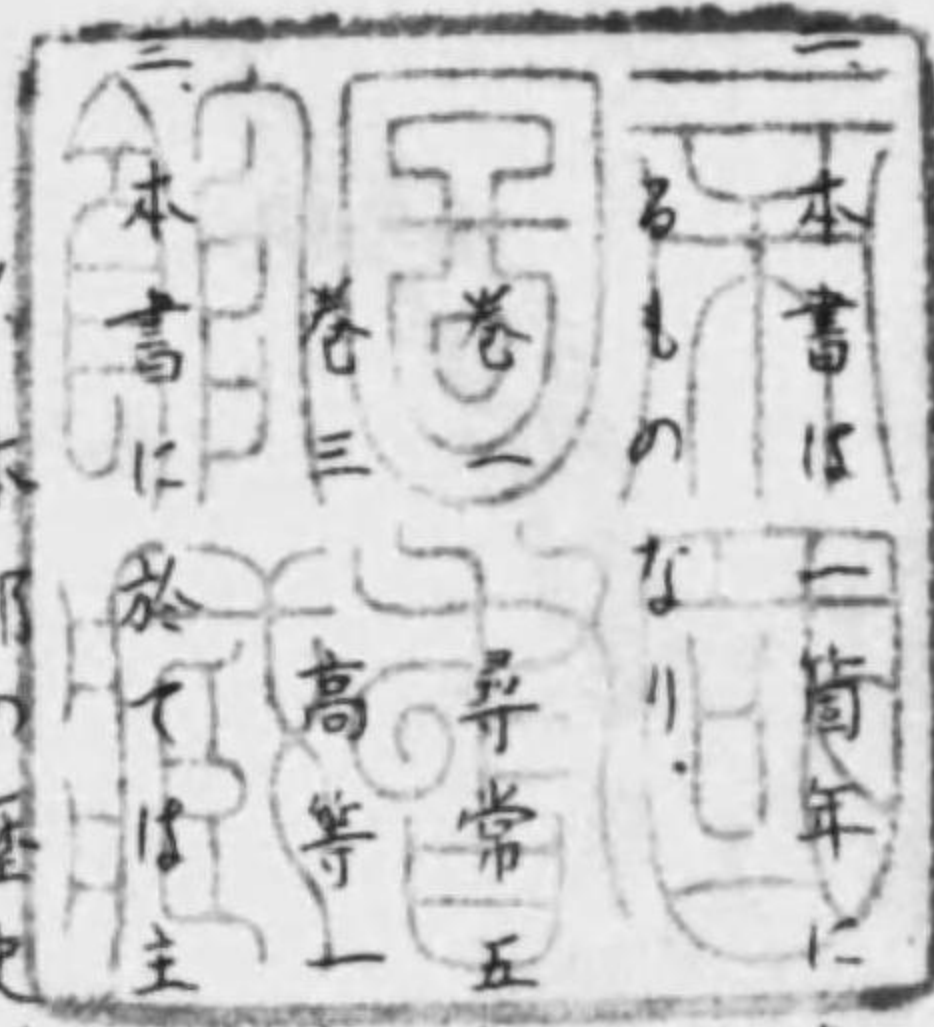


凡例

一 本書は特に本郡小學校児童をして郷土を理解し郷土愛好の念を養はしめんが爲に編纂せるものなり。

二 本書は二箇年に各一卷を配當し左記の如く使用せしめんとす

卷一 尋常五年  
卷二 尋常六年  
卷三 高等一年  
卷四 高等二年



1. 本郡の歴史地理に關する事項

2. 本郡の先賢及業績に關する事項

3. 本郡の史蹟名勝に關する事項

4. 本郡の産業、交通、教育に關する事項

5. 本郡の郡勢及風俗習慣に關する事項



四 本書は日野郡小學校校長會の決議により昭和四年教育勅語四十週年記念事業として編纂する事として先づ卷三を編纂し其後日野郡教育會の事業にうつして編纂せり。

五 本書は内藤岩雄、宇田清隆、島元重、伊田正吉、青戸武治、芝田義徳、木村正義、梅林真朗、木下胤治、池田豪治諸氏を編纂委員として編纂せるものなり。

六 本郡内各方面の方々並に各學校職員生徒諸氏が本書編纂上につき多大の援助を與へられたることを感謝す。

日野郡教育會

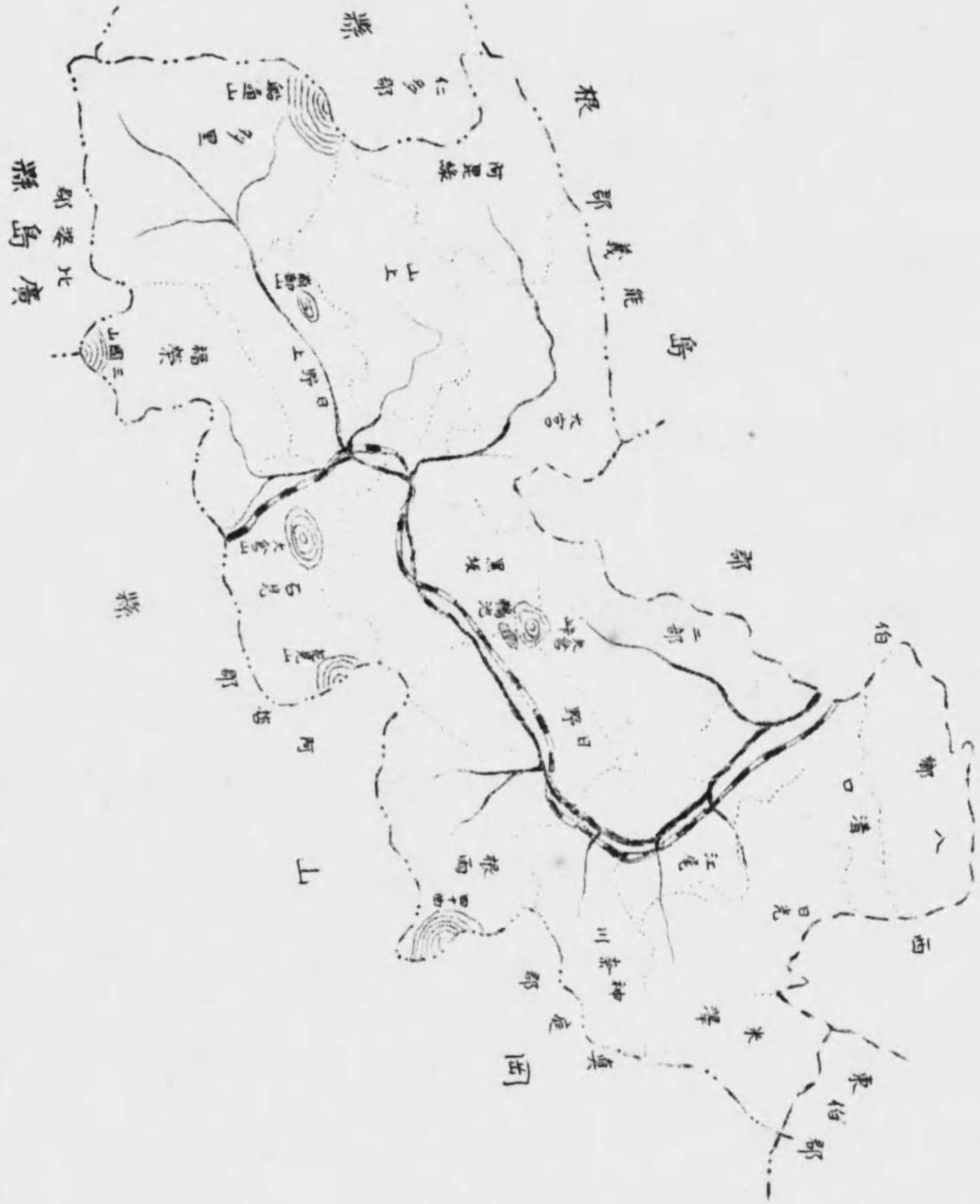
郷土讀本 卷一 目次

一	我等の郷土	一頁
二	田植	四
三	樂々福参り	七
四	螢田と七巡田	一一
五	寺子屋の話	一五
六	教育奇聞	一七
七	草花遊	二一
八	はんざき物語	二四
九	若松紀行	二七

一。	龍王龍	三二
二。	出征兵士の歌	三五
三。	妙見山合戦	四一
三	七色壑	四四
四。	日下開山朝日山	四五
五。	官角力	四九
六。	電燈になるまで	五二
七。	元弘の忠臣	五七

附 日野義行朝臣及金持景藤朝臣頌歌

目次終



郷土讀本 卷一

一、我等の郷土

生れ故郷ほどなつかしい慕はしい所はない。まして、そこにいな  
な貴い歴史があつたり、よい景色があつたりすればなほ更である。

我等の郷土日野郡は、太古の所謂出雲文化地方の外廓を成してゐる地  
區で、日野川の流域を占めた大豁谷である。

此の地に來遊する名士が、異口同音に、そのかつしりした深みのある  
光景にふれると、神代の昔に復つた様だといふ。

仁多郡から阿毘羅・山上・日野上・石見へ通じて、備中にこえる道筋  
は、上古に於ける唯一の重要道路であつたのであるから、神代の頃も、

我等の祖神が、劔をばき、玉を中らめかして御通行になつたこと、思は  
れる。その道筋に沿うて樂々福神社の御祭神吉備津彦命御一族の御祀し  
てあることを考へて見ても、九州から吉備へ、そして出雲へ、更に海を

外廓—そとがまへ

豁谷—たに

異口同音—た  
くさん人が同じ  
様にいふこと

わたつて朝鮮へとお進りになつた御趾が憶はれる。

我が郡は最も良質の砂鐵の産地で、上代はもとより明治の頃までも、日本全国に對して、鐵の王国として、謳はれたものである。刀鍛界で印領鋼として珍重がられるのは、實に我が郷土の産で近くは、皇室の御守刀の材料として御用ひになつた程である。奈良朝の頃に現はれた名刀工大原安細・眞守父子の如きも、恐らく我が郡の出身であつたであらう。梅の自然林の中で、その木によつて作られた良炭で、夕、ラを吹いてゐる白衣長髯の人を想像する時、太古、石器時代から鐵器時代への過渡期に、大擧して鐵をもとめて我が郷土地方へ入り込んだ祖先の勇ましい面影をも、あり／＼と見る事が出来よう。鐵は我等郷土人の生活の源泉であり、又大なる誇であつた。

今から千二百餘年前、我が日野郡が僅かに六村に區切られて、日野・阿太・葉侶・神戸・武庫・野上と古書に書き載せられた時代から、しばらくは中央の文化に遠ざかつてゐた様に思はれるが、鐵の光と、大山寺の法燈は、依然としてか／＼やいて居た。南北朝時代に日野義行・金持景

大原安細・眞守  
本郡出身の名刀工  
一十年以前大同元  
年にして今より約  
八百年前の地に  
大原といふところ  
に居たといふこと  
阿太・葉侶・神戸・武庫・野上  
西河地方  
武庫・今山・野上  
野上・今山・野上  
古書に記す

藤二忠臣を出したことは、我が郷土人の最も光榮とする所である。

戦國時代には、出雲の尼子氏と安藝の毛利氏との勢力の接衝地点であつただけに、勇將猛卒雲の如く、江美城・不動嶽・鎌倉山・竹見山等の戦に花々しい勇名を残して居る。

山高く水清き處に偉人が生れる。三條公の師富田織部・易學の大家伊藤宜堂・蘭學の泰斗三谷泰作、その他各方面にすぐれた人物が頗る多い。

山間僻陋・交通不便な地だけに我等祖先の活躍には一層感心させられるのである。

こんな歴史を生んだ我が郷土は、北に大山の秀峰を控へ、その山脚は八方にのびて、美しい平野、清らかな谿谷となり、我等の郷土を守つて居るもの、如く、南に神代の古跡鳥髪峰があり、そこに源を發する日野川は、郡の中央を貫流して、全部の大動脈となり、大神山の西方を廻つて夜見瀆の根方で日本海に入つてゐる。道後山・大草山・鬼林山・大倉山・寶佛山・鬼住山等の山容、石霞漢を中心とする溪谷美、その他到る

法燈一休徳の御燈

江美城・江見村にあり  
不動嶽・黒城村にあり  
鎌倉山・黒城村にあり  
竹見山・湯原村にあり

三ノ上・春山・北山  
で高き山にあり  
大草山・鬼林山にあり  
御影の如く人を思ふ

鳥髪峰一今船通  
山といふ  
大神山・大山にあり

處、山容水態佳ならぬはない。山紫水明の風光は、我が郷土人のあこがれの的である。

經濟方面から見て、全部四十五方里の九割までが山であるだけに、底力がある。これによつて、製材・製炭・牧畜が行はれ、郡中の田畑を養ふ堆肥もこれから採られるのだから、本郡産業の基礎は山にあるといつてもよからう。

我等はこの郷土を足場として、外に向つて大いに雄飛すると共に、此の郷土の發展の爲めに、相携へて奮闘せねばならぬ。

## 二、田 植

朝もやがあたり一面にたてこめてゐる。あちらこちらの苗代田で、賑やかな話聲がしてゐる。やがてのびやかな唄聲につれて短冊形の苗代の苗は、見る／＼うちにとられて行く。大方取り終つた頃に、東の山の端から朝日が出る。娘の派手な帯、赤い袴、白い手拭が浮き立つて目につく。

山容水態—山の形も水のあるありさまも山紫水明—山水のしきのよいこと、あこがれ—思ひこられる。

奮闘—勇氣をふるつて戦ふこと。

く。

遠近の本田に代播が始まる。牛をばげましながら勢よく泥水を蹴つて行く人と牛の群が見える。

「さあ皆さん、この田から植えて貰ひませう。」と、言ふ聲のもとにずらりと早乙女が並ぶ。

うちの姉さんも、ついこの間来られた近所のお嫁さんしまじつて居られる。喉と節の自慢な隣のお爺さんがさげを始められる。ドロスコドロスコドロスコドン……と氣持のいい、太鼓の音が、澄みきつた朝の空気を震はせて横がつて行く。

左下「朝起きて、ヤアレ、細戸にあけて、見渡せば、ヤアレ、見渡せば、ヤアレ。」

とお爺さんの節面白く、聲が田の面をなでる様に滑べると、  
「早ね、ヤレ、見渡せば、ヤアレ、黄金にまさる朝日さすし。」  
と聲を揃へて唄ふ。それに合はせて各々の手から巧みに漂り出されて植ゑられる早苗、時を定めてくらり／＼と上手に反されて行く定規、見

左下—田植に太鼓をうち、音節をとりながら種方を植ゑる人。

てみるうちに、青い草屋でも換げる様に、田一面が美しくなつて行く。

六

燕が、今しかた植えたばかりの田の面を、かすめて飛ぶ。時々畔からヒューと風を切つて、苗が飛んで美しい早乙女のおたりで泥水があがる。一寸賑やかな笑聲とざわめきが始まるか、また歌に誘はれてもとの調子にかへる。こんな時にも植える手先は決して乱れることはない。

小山の向ふの田からも水鼓と歌聲が流れてくる。ほんとうに忙しうではあるが、希望と平和が村一帯にみちみちてゐる。

陽は大分昇つて、冷たかつた田の水がぬるんでくる頃、晝食の水鼓がなる。

「上らうぞ。」

と言ふ聲に誰も一齊に腰をのし、田から上り、小川で泥を洗ひ落して晝食にする。待ちかゝつてゐた子守達は、背から乳飲子を下ろして母親に渡す。

晝休に腰の痛みを忘れて、また植える始める。次から次へと植えて、植

えて、廣い田圃もほとんど青田になる頃、蛙が其處此處から鳴き出して、薄い夕もやが何處からともなく流れて来る。

終日働いてやつと植える終つた人々は、てんでに農具を持ち、植える終つた田圃をふりかへりながら家路を急ぐ。

蛙の聲が村中の田から田へます／＼盛んにいびきわたり、山の村は次第／＼に暮れて行く。

— 高一男 —

### 三、 樂々 福参り

五月一日、今日は愈々樂々福参りの日だ。楽しい想像と賑やかな談笑とを乗せて、汽車は早くも生山驛に着いた。こゝから樂々福神社迄八軒少し長い路ではあるが、勇みだつた我等には何程の事もない。

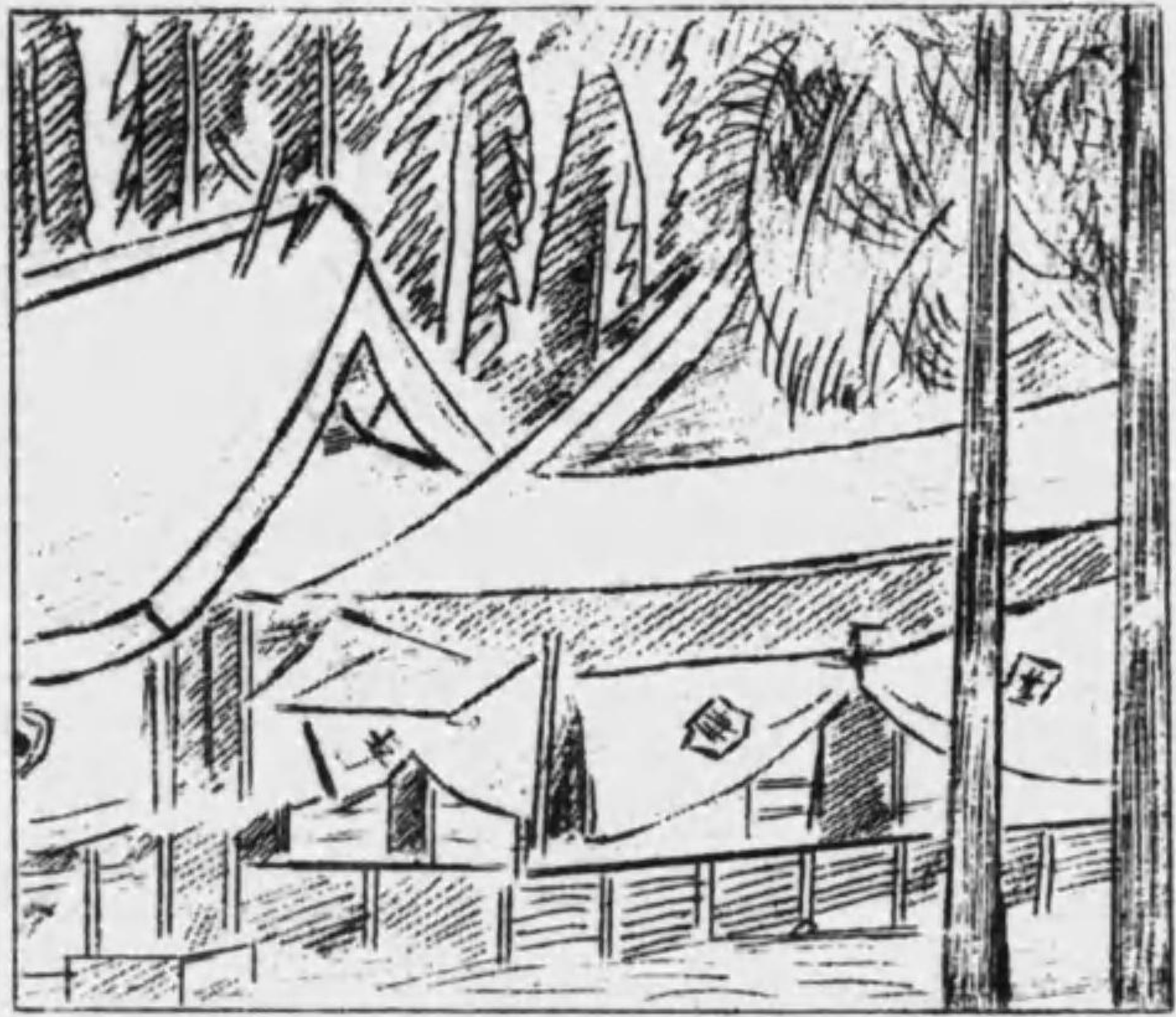
朝霞のこめた平和な里を、日野川の清流に沿うて西に進む足どりの軽いこと。

大正校の前を過ぎて矢戸に向ふ頃、縣道を離れて右手に、石の大鳥居

七



を見受けた。先生のお話によると、あそこは往時の参道で、お宮の東西



各二軒餘の處に、あつた大鳥居が立つてゐるのださうだ。規模の大きなお宮だなあ、と感じた。やがて右も神々しい宮内の里に入る。左右にせまる山々は、すべて杉檜の造林だ。鬱蒼たる杉林の間を通り過ぎると、はるか向ふに幟がヒラ／＼朝風になびいてゐるのが目についた。ほんに今日は、例祭なのだ。十時半頃、目ざす郡社西樂々福神社に到着した。丁度祭典の真最中で、鳥居をくゞつて拜殿の前に整列して禮拜の後、暫らく

往時一昔

規模一かまへ

鬱蒼たる杉林の光つてゐること

例祭一三大祭の一にて毎年一回行はる

祭典の模様を拜した。縣からの供進使の方が今玉串を捧げられ、讀いて参列の方々が順次玉串を捧げられた。校長先生の奉奠の時には、我等も一齊に最敬禮をした。あたりはシーンとして何とも言へぬ莊嚴な感じに打たれた。

祭典が終ると、神職の方がこのお宮の祭神並にこの地方の歴史について話して下さつた。我等は襟を正して拜聴した。右後方に聳える細姫命の御陵といひ傳へられてゐる崩御山を望みながら、東西両社の祭神大吉備津彦命、若建吉備津彦命の御兄弟を始め、御関係ある神々の御活動を感じ浮べて、今更の様に、皇室の御恵と神國日本に生れた幸福とを必々と感じた。特に強く印象づけられたのは、当社が往時日野大社と號して日野全部の總氏神であり、藩主の祈禱所でもあつて、上下の崇敬極めて厚かつたのであるが、維新以來世の變遷につれて、いつしか社殿の營繕も出来なない程の荒廢に陥つたこととあつたと流を浮べてお話になつた一事であつた。しかし現在ではこんなに社殿も立派に整へられ、盛んな祭典も行はれる有様を拜み、大層嬉しく心強く感じた。

供進使一神職にまなへる神職等、玉串を捧げる人、玉串一玉のつけられた神、莊嚴な感じに打たれたこと

細姫命一祭神、大宮の皇后、大吉備津彦命、若建吉備津彦命、皇室の皇子、御関係ある神々の御活動を感じ浮べてお話になつたこと

營繕一家屋などの、荒廢に陥つたこと

お話がすんで、一同お宮を一周した。注目すべきは、本殿の造りが真に壯大を極めてゐる事と、本殿の西側に画家赤井陶齋の大額が掲げられてゐる事とである。境内の大銀杏大杉の木等、すべてが神々しい限りである。

正午前、西縣社を辞して、更に東縣社に参拜した。東縣社は縣道から一寸上つた小高い丘の上にある。参道の両側は古い櫻の並木で、咲違はた数本はあやうど花の真盛りであつた。並木の下には各種の店が並んでゐて、さかんに人を呼んでゐる。参拜の人も道に一杯で、非常ににぎやかだ。我等は人波をわけて漸く社前へ進んで整列、禮拜して解散。境内の廣い芝生に膝を下ろしてお辯當をいただいた。食事中心先生は、この境内にある太刀洗の池や鬼塚や、いろ／＼面白い傳説を話して下さつた。境内には土俵場もある。秋の祭典には、郡内青年團の奉納角力もあるとのこと。

二時間ばかり遊んでゐる中、やがて祭典が始まるとみえて、社務所から嚴しい正装の供進使が社殿へ参進せられるのを見受けた。袖裏渡御の

赤井陶齋、日野川  
宮内の人、明治初年  
の、四、五、六、七、八  
画とを筆墨が

太刀洗池、鬼塚を  
新つた太刀洗池を  
跡を止めてゐるのみ  
鬼塚、鬼塚山、  
鬼塚の首を埋め  
給ふたと傳説が  
ある

神輿渡御、いみじ  
のみこしがみま  
なされること

御儀も三時頃から始まるとのことであつたが、我等は定刻が来たので、名残を惜み、歸路についた。

日野川を隔て、東西に相向つて立つ兩縣社の偉容を胸に描きつ、車中の人となつたのは、もはや日野川の川面一帯に、夕靄が美しく立ちこめる暮方であつた。

### 四、螢田と七巡田

今から四五百年も昔のこと、阿毘羅村に法華坊といふ道堂があつた。祀る人もないのど上尊も杤も風に散つて、壁も落ち柱も朽ちその中に安置してあつた御佛も大それたはな有様であつた。

ところが、この御堂で毎夜毎夜人の居らぬのに護経の聲がして、鰐口が自然に鳴り、或時は御堂の上に燈が上る等、幾多の不思議な事があつた。

こんな工合であつたから靈驗もたいしたもの、里人を幸福にお守り

偉容、大きなすかた

道堂、道はたの小  
さい堂

鰐口、圓形、毎年  
な鐘の一種

靈驗、神佛のあら  
たがなしらしこと



四十料も逃げのびたつもりで、ホツと一息いれて喜んでゐるうちに夜が

になり、疫病・難産等色々の厄難もお救ひになつた。この噂が横がり、その御験のことなど聞き傳へて、この御佛を奪つて自分の村に祀らうとする者さへ澤山あらはれた。

或夜盗人が来て、その御佛を盗み出した。道を急いで一夜中歩いて、三

明けた。よく／＼見ると、こはいかに、御堂からやつと四料ばかり離れた今の山上村大字堂本であつた。盗人は怖れて御佛をその澤田に捨て、後をも見ずに逃げ去つた。

ところが、その田のわり、毎夜毎夜、七日の間、光がさして、丁度数千の螢が群がつてゐる様であつた。人々は怪しみ恐れながら、よく／＼見ると、何と不思議ではないか、一体の佛像が埋もれておいでになつたので、驚いて掘り出し奉つた。阿毘羅の人ばこれを聞いて迎へ奉り、もとの通りに安置した。

これからこの田を螢田と呼ぶやうになつたのださうだ。

かういふ事があつて幾年か過ぎた。ところがまたも以前の盗人が来た。今度こそはきつと御佛を奪ひ取つてしまふ覺悟をかため再び御佛を盗み出してむたすら道を急いだ。ところがどうしたことか道がくる／＼と廻つてゐるので、ボロ／＼汗を流しながら廻り廻つてゐるうちに東の空が白んだ。やれ嬉しや、大分逃げのびられただらうと思つて、あたりを見れば、今度は御堂から少しばかりはなれたところの田を、廻り歩いてゐ

たばかりであることがわかった。盗人は驚いて、御佛をまたも其處の田に投げ込んで逃げ去った。

村人が盗人の足跡を辿りてよくしらべて見ると、一夜のうち、やつと七へん同じ田の畦を廻つてゐたことがわかった。村人は大急ぎに御佛を掘り出して、その御堂に祀つた。それからはこの田を七巡り田と唱へる様になつた。此の田は今の解脫寺から西南三百米の地点にある。後、ここに碑を建てて、このことを後世に傳へてゐる。

かやうに二度までも盗み取らうとした盗人もあらたかな御佛に恐をなして遂に心を改めて熱心な信徒になつたといふことである。

この佛像こそ、足利の代日野中將といふ武士が奉じてこの地に安置したといはれる日蓮上人の像で、上人自作開眼せられた佛像である。後、人皇百十代後光明天皇の御代、今の地に解脫寺を建てこれを安置し奉り、開山供養するに至つたのである。

佛徒しんこうする人々

開眼しつて精神を入れたこと

開山しつての御代に供養し奉りまつたこと

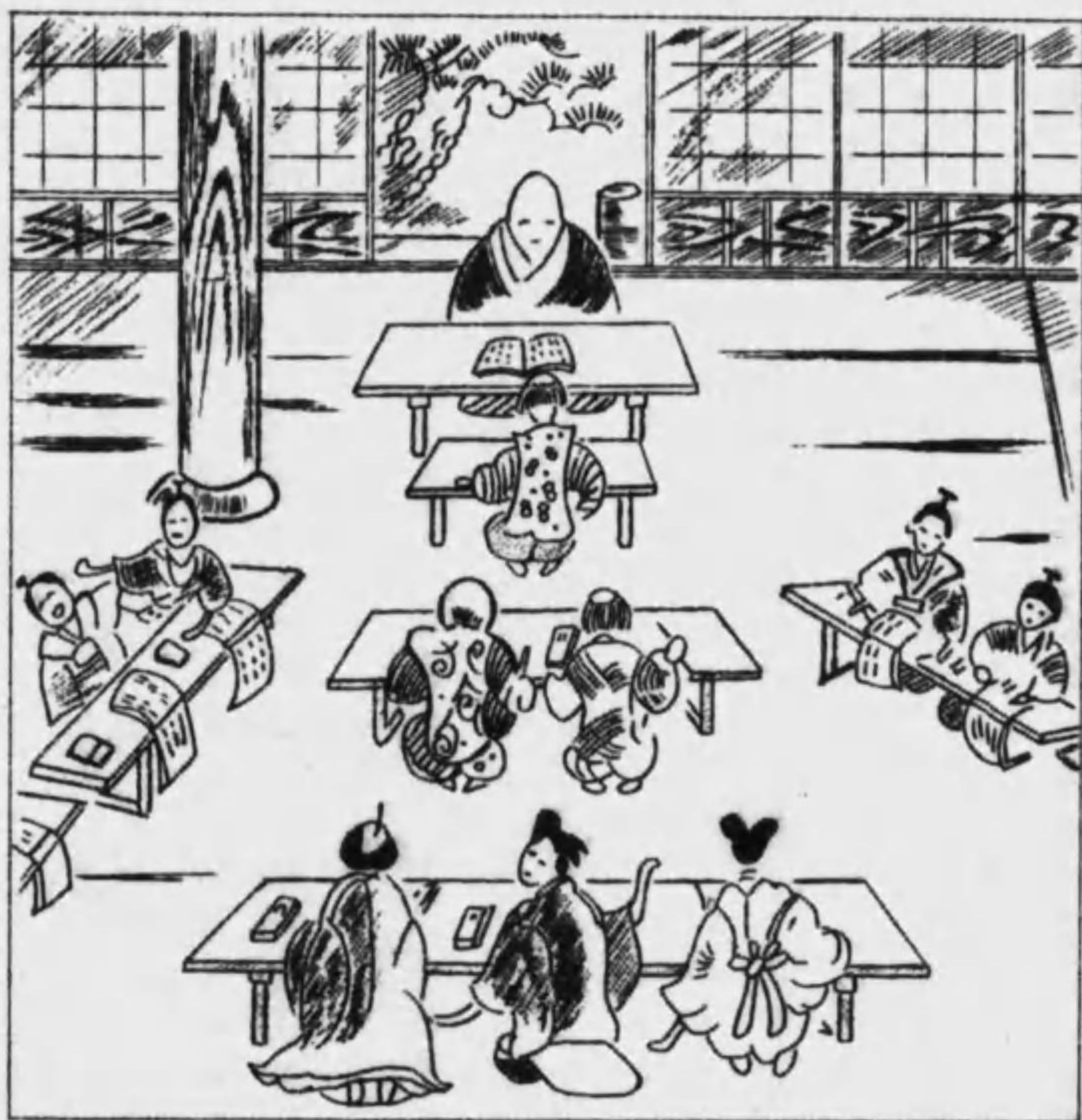
### 五 寺子屋の話

秋の静かな夜に、粟を焼きながら、お爺さんから昔の學校の話をお聞きしました。たいそう面白いと思ひますので、そのお話の要綱を書いて見ませう。

『徳川時代の學校は寺子屋といつて、寺や、代官屋や、醫者屋で開かれた。その外文字を知つてゐる浪人や、農家でも設けてゐる所もあつた。主に寺で開かれてゐたから寺子屋といふのだ。』などいふけれども、もとは寺子屋と言つたのがてらこやと約まつたのだらう。その頃の子供は、たいてい頭には髪を結うてゐて、小さい子はとんぼ、大きな子は前髪であつた。今とは違つて、畳の上に行儀よく坐つて、前には低い机を置いて習つた。

讀むこと、書くことが日課で、たまには算盤も教へた。朝から晩まで同じことを繰り返すので、手習兒等は随分苦しい思ひをした。それに習ふ事柄が商賣往來・名頭・國畫・腰越など、子供には分らぬ事ばかり

代官屋・神職の家  
浪人・主君をばな  
れた武士



だから、随分つらい  
 思ひをしたものだ。  
 草紙といつて反故を  
 綴じたものに、書いて  
 は干し、干しては  
 書くので、面白味も  
 何もあつたものでは  
 ない。遠慮まじりに  
 繪でもかくと大それ  
 叱られた。中には墨  
 をつけ合つたりなど  
 して、見つけられて  
 罰をくふものもあつ  
 た。体操や運動はも  
 とより無く、唱歌の

やうに歌をうたふことなどは悪い事のやうに教へられた。こんな風だか  
 ら、身分のよいものとか、特別な家庭の子でなければ寺子屋に上らぬの  
 で、田舎では一箇所大てい十人位までのものであつた。それでその頃は  
 村中に文字を書くものはいくらもなかつた。  
 こんなお話を聞きながら、私はしみじみと今頃の私共の幸福を考へさ  
 せられました。

## 六 教 育 奇 聞

今頃は、どんな子供でも、四つ五つから「学校へ行く。学校へ行く。」  
 といつて、小学校へ入學する時期の來るのを待つてゐるが、今から四五  
 十年前には、學校へ行くことを嫌つて、山の方へそれて遊ぶ甚したり、  
 お宮の隅で角力を取つたりして、學校へ行つたやうに装うて親をだまし  
 たりしたものだ。

こんなことは、皆さんは實にをかしなこと、思はれようが、決してを

かしいことでは無かつた。その頃の課業は、寺子屋の課にもある通り、子供にはわかからぬむつかしい事を、一日中讀んだり、書いたりすることが多くて、体操や唱歌や圖画のやうな面白い學科は無かつたのだから、子供にはずるぶんつらい課業であつた。それに少し騒いだりすると直ぐ罰を受ける。その罰がまた頗る厳しいもので、直立してゐるのが一番かゝる。其の上は直立して両手を上へのばしてゐる。もつと重いのは、両手に水入を捧げたり、線香に火のついたのを手にせらるゝたり、更にひどいものになると、頭の上に大きな腰掛や机をさしあげてゐるといふ風であつたから、子供は皆ちり／＼してゐた。習つたことを忘れてゐると、先生が鞭をもつてゐて、机をたいておどしつけたり、たまには背中などぶつたものだ。こんな風だから子供が學校を嫌つてゐたことも推察できよう。

なほ更に不思議な事は、明治五年に學校といふものが始まつた時に、村中の人々が竹槍や鉄・鎌などをもち出して、先生を殺したことである。それは次のやうな次第であつた。

毛唐人(西洋人)をいやめていふこと

その頃、西洋人を恐れ嫌つて、誰いふとなく「毛唐人が生血をとりに来る」といふ噂がたつた。そこへ先生が洋服を着て来たので、「ソレ子取ぞうか来た」といふから、大騒ぎになつて、無二無三に殺してしまつたといふのである。

そんな風だつたから、明治十年代に入つても、學校は大てい民家を借りてゐたもので、初學年生などは、内庭に座を張つた時いで習つてゐた程で、庭が狭いので十分に遊ぶことが出来なかつた。

明治十五六年の頃であつた。体操が初めて課せられた頃には、田の畦に雁のやうに一行になつて、手や脚を振つたことがある。少し臆病な子は逃げ隠れたり泣いたりしたもので、父兄もをかしかつて笑ひこけたものだ。

明治二十一年に始めて我が日野郡に一つの高等小學校が出来た時、全郡から集つた生徒は僅かに四十人で、最上級生は六人しかあなかつた。全校に女子がたゞ二人だけであつた。教師は多く地方の立派な先生であつたが、一人の先生は工科大學二年退學の人であつた。

二。  
こんな風で一方では漢文や和文を學び、一方では朝から夕までニエーナ  
シヨナルをかへて得意になつて歩きまはつたものである。

その頃は西洋かぶれの絶頂であつたから、校舎は小さいながら全然洋  
式であつた。高等小學校の生徒は洋服を着て、「ユ一、アール、ベリ一、ア  
バツド、ボーイ」などしゃべつて、傘やかばんにもアルハベツトで姓名を  
書いたりしたもので、中には少年がなまいきにも不似合なハイカラ髪を  
分けてゐるといふ風で、今から考へればほんとに奇妙なものであつた。

その頃の人々は、高等小學校を最高級の學校のやうに考へてゐたから、  
生徒も比較的大人ぶつてゐて、演説會や辯論會などしきりにやつてゐた  
ものである。これは國會開設間際の影響をうけたにもよるだらう。

かうして開校はしたが、一ヶ年で開校してしまつた。それは交通も不  
便であり、父兄の了解もない爲めに、生徒が段々減つて、經營困難に陥  
つたからである。

皆さんはこんな現象を如何にも合點の行かぬこと、思ふだらう。こん  
な際に於ける當局の苦心は並大ていではなかつたのである。

ニエーナシヨナル！英語  
讀本の名。

ニエーナシヨナル！ア、バツト  
ボーイ！  
名は非常に悪く、  
だといふ意味の英語  
アルハベツト！A.B.C.  
二十六文字のこと

比較的、ここでは三味  
として割合に。

當時のこのやうにあつ  
てゐたので、ここでは  
學校を經營してゐ  
る人のこと。

### 七、草花遊

( ) 早 春

こともなく年の暮れしれ嬉しきに  
なほあらたまの年は来にけり

( ) 梅 鶯

鶯の今朝の初音やき、つらん  
にはのしら梅花咲きにけり

( ) 若 菜

春雨やふる年よりも二葉にぞ  
おふる若菜に心かくらん

( ) 花 盛

かくばかり花の盛を見てくらす  
春は山家ぞすみよかりける

草花遊！  
山竹堂助の歌集。  
重助は天保年間  
の歌人にして、  
堤村文住の家  
代々農を営み、

あらたま一年の地詞

○ 苗 代

春雨や雪消の水をせき入ルイ  
なほしるいまぐ小山田の里

○ 待ほとゝぎす

藤なみのなみに思ふかほとゝぎす

まつにか、りてくらす我が身を

○ 和歌を好み家業を忘れ徒に一生を過しつるを思ひて

おもひ入る筆に心を任せつ、

硯の海に身をしづめけり

○ 雨ふればしきりにほとゝぎす鳴く

むらさめは浪なりらんほとゝぎす

五月の山にふり出で、鳴く

○ 早 苗

まつに待ちと  
かりたり

ふり出で、ほとゝぎす  
のなくこと  
ふり出で、ほとゝぎす  
たり

我が作らかど田の早苗とりわきて

植ゑてうれしきけふにもあるかな

○ 螢

夕ぐれて蓮か中の我が宿に

とひ来るものは螢なりけり

○ あふぎ

堪へかぬるあつさもはらふ肩には

たがいつの世の風やこめけん

○ あさがほ

中垣に植ゑてながむる朝顔の

隣のかたに花さきにけり

○ 落 葉

手もたらくはらふにたへぬもみぢばの

とりわきて、早苗と  
採りにとりわけて  
かきわたり

たがー誰



風に散りしく夕暮の庭

○ 雪如花

冬ながら花の姿の雪ぞ降る

くものあなたは春にやあるらん

雪如花

### 八 はんぎき物語

「殿様また一人小原の川岸でやられました。主人の前に手をつかへてかく申上げる若黨を見ながら、半口藤右衛門はいよく最後の決心を面に現はし、

「不肖藤右衛門は、太閤殿下のお眼鏡により、この地方の守護を承る身であるのに、かくも度々の百姓の難儀、見捨てるわけには参らぬ。此の上は身共が一生の勇を現はして、この外道を退治してくれよう」と立ち上りながら、一子亀之丞を呼びよせて、政治向きの事などを一通

若黨一若黨の  
けうい

外道一外道以外の道  
辨じて思慮深き  
ものわらもの

り言ひきかせた後、去年京の代官に申付け造り置かせた組楯を、裏の上蔵から取り出させて一應檢分し、人夫数人に擔はせて洲河崎・久連の村界である會見が淵の近くまで送りつけた。

藤右衛門は珍装も軽々と、生きては再びこの邸を踏まぬ強い覚悟をさだめ、二振りの名刀を携へて現場へと向つた。その中には、自慢の備前物祐定の一刃がある。先正主君太閤より賜はつて、平素身につけ護神の神と崇めて居る寶刀である。

供に連れられた若黨は小原の島に飛して置き、唯獨り水邊に置かれた楯に入り込み、静々と日野の川瀬を下りながら、早や會見が淵にさしかつた。

この淵こそ深さ何十丈とも計り知られず、數年この方、往來の旅人、地方の百姓・商主などを度々にわたつて喰ひ殺した巨大のはんぎきの棲家なのである。見ろからに物すごい淵である。

人間臭い楯に、すばとはかり、はんぎきは忽ち巨体を現はして飛びかかつた。火炎の色の大口をあけて、噛み破らんと猛りくるふ。然し流石

はんぎき山椒魚の  
地方名



は京の香近  
 どもが心を  
 こめて造つ  
 た物、どう  
 してやすや  
 す設たされよ  
 う、詮方な  
 くて怪物は  
 手足諸共こ  
 の樽を抱き  
 込み、遂に  
 水底深く潜  
 り入つた。  
 かくあるべ  
 しと待受け

三六

香近、大工のこと

て居た藤右衛門は、樽の中から抜き放つたる名刀に力を込め、處きらは  
 ず怪物の体に突き通した。しかし流石は年經た大はんざき、十一本逆は  
 又またこぼれて彼にも立たず、何の手ごたへもない。残るは主君から賜つた  
 祐定の名刀ばかり、「嗚呼天地神明加護し給へ」と祈願を込めながら、怪  
 物の心臓と思はれる處を見定めて、渾身の勇を奮つて突き立てた。  
 數十ヶ所の傷にもひるまなかつたはんざきも、今度の致命傷には遂に  
 弱り果て、樽を抱いたまゝ、水面に浮び上り、あはれその巨体を横たへた。  
 日野の川瀬は、その昔、素盞鳴神が大蛇を退治て血の水を流され、そ  
 の色が火のやうであつたので火の川と名付けられたとも傳へられて居る  
 が、會見が淵の川波に再び神代の狀さまを現出したと、時の人がはめた、へ  
 たのも無理はない。

### 九、若松紀行

奇勝を以て鳴る石霞溪の探勝を心にしながら、生山で自動車を拾つた

三七

渾身の勇、全身の  
 致命傷、身を失ふ  
 に至るまで

吾等の一行は多里に向ふ。自動車は日野川に沿うて右折左曲した道を走つて行く。川上の溪流からは水煙が盛んに立ち昇つて水聲の潔いことは人の世のものとは思へない。日野狭の妙趣頗る知はつて、さながら仙境桃源に入るの感がある。

身をゆらげる事一時間ばかりにして多里の里に着く。此の地は昔の宿場で相當繁華な所であつた。と聞くが今はその名残りを纔かに覘ふに足るばかりで芭蕉の夢塚の小碑も物あはれに旅情を誘ふにすぎぬ。四圍の山の姿や町場の屋根が、少し急に立ち並んで居るあたりは丁度廣助の浮世繪を見るやうだ。

停留所で自動車を捨て、憩ひ間もなく直ちに少年を道案内として若松山をさして行く。

新屋の村尻から山路にさしかゝると、道は急に昇つて急角に曲る。馬の往來が頻繁と見えて黒土が踏みじられて居る。小暗い松林の中を暫く通り抜けるると小高い所に出る。伏すれば若松の溪流が淵となり、頼となり散らされた橄欖岩の蛇腹に狂奔しつゝ、流れて居る。直ぐ前の高い山の鼻

仙境桃源一世間を  
はなれた別天地

狂奔くちひ走る

に小屋があつて雨ざらしの白い小旗を立てられて居る。「何か」と問ふと、「大塚の支点だ」と答へる。「あ、旗が出ておますから、今に鐘石が出来ますよ。」指す方を見やれば、空中に架つた一本のロープが秋の午後の陽射を浴びて蜘蛛が銀線を曳いた様に光つて居る。程なく小屋の中から前しが、北を腰に當てた老人が出て来て、手をかざして向ふの小高い山を見た。其の途端である。山頂から異様な唸りを生じて、一同の視線を同時に吸引すると、黒点が漸次其の大きさと、音響と、スピードを増大しながら、飛礫の様に空中を疾駆して来る。「ニューウー……………」滑車が氣持良くワァーロープを軋る音だ。

疾駆一非常にはやくはしむこと  
寝家一さびしいこと

を手早く引きはづして次のロープに繋げ替へる老人の早業・手練なかな  
かよく手馴れたものだ。架け替へられた鑛石は又得意の滑走スリッパを起して次の  
の支点にいきなり突進して行く。

滑走、すべってはいし

行く手は遙かに開けて若松の山容を正面に仰ぐことが出来る。山背あ  
らばに露出して此立あきしてゐる様子は、此の世界的な鑛山を呼びかけて確  
かに郷土の偉觀であらう。

屹立、そりたつこと

坑夫長の案内で坑道の入口に立つた。暗い坑道の奥からカンテラの火  
が立ち籠むる水蒸気に輪を畫きながら浮かび出た一人の坑夫。私等一行を  
迎へに來たのである。足下に氣を配りながらぬかるみの中をぞん／＼奥  
に進む。奥に進む程暖かくなる。坑道はさ程遠に長くは無かつたが餘程  
組織的に掘り進められてあつた。あちこちと廻坑してゐる内に幾度とな  
くハツパの音を聞いた。今ハツパをかけたばかりの所だと云ふ所もあつ  
た。坑内で立ち働く人達は皆黙々として、時々人珍らしさうに振り返つ

た。黒いクロームの肌は幾万年の昔を物語るかの様にしたしのぞいてゐる。  
運鑛場では五六人の若者が地境の支点に向けていそがしく運鑛してゐ  
る。洗鑛場では樋の口から勢よく流れ出る水が鑛石にぶつかつてあた  
りに電沫を浴びせかけてゐる。撰鑛場に足を運ぶとタービン式の極めて  
大仕掛な建物が谷間を埋めてゐる。一種異様な鑛山氣分がひし／＼と身  
に迫るのを覚える。

この鑛山の歴史・營業の組織・用途・産源・販路等の有益なる話を聞  
き、前途愈々有望なるを感じながら山に別れを告げた。山谷の秋の陽射  
しは短い。

冷えた空氣に皮膚を振はせながら、もと來し道をたどる。夕靄が薄く  
谷間にたゞよふ。山は寂漠だ。無盡藏に鑛石を宿した若松。世界的に誇  
るに足る若松。お前は永久に郷土の黙したる勇者として偉大であつては  
しい。



一〇、龍王龍

昔も昔も昔の承平頃、須賀の郷に内井城主菅高左衛門尉同臣といふ殿様が居ました。

同臣はよい殿様で、毎朝古木の茂った城門を開いて白い馬に乗って領地を巡って見れば、領民の幸福を祈つてゐました。

ある年のこと、夏から秋にかけて大雨が降りつゞいて、その上大嵐が吹き、須賀の田畑は大變に荒れました。いつもなら楽しい秋である

龍王龍、黒坂村大字中管にあり高さ五十五米須賀の郷、黒坂村のこと

のに、この土地の百姓達は不作を悲しんで、稲を刈る元氣もないほどでした。その上、悪疫が流行してきました。百姓思ひの殿様は、城の内に社を造つて、「一日も早く悪疫をとりて百姓をお救ひ下さい」と、七日七夜の断食祈禱をいたしました。丁度満願の夜でした。すつかり瘦れた殿様は、心をふるひ起して冷水で身を清め、いつもの通り神前で一心に祈つてゐますと、ああら不思議、何となくよい氣持になつて、うつとりと我を忘れて夢の國に行つたやうになりました。

X X X

遠くから微妙な音楽の音が聞えてきます。あたりには美しい花が咲き乱れ、色々な小鳥がきれいな聲を鳴いてゐます。空はきれいに晴れてゐます。と思ふ間もなく、やがて白い白い一條のふしぎな雲が現れて、だん／＼下りて来ます。近づくと、花を着かざつた一人の天女が、金銀で造りかためた美しい角を手にして、雲に乗つていらつしやいます。殿様は、思はずありがたさ尊さに、頭が下がりました。すると天女は殿様の前に立ちどまつて、「同臣謹んで承はれ、汝百姓を

断食祈禱、食物をたべて心に神慮に祈ること

可愛がり、領内の安穩を祈る心掛、誠に感心の至り。これより南八町にして、直も小崎谷奥の林の中に一條の龍あり、其處に祠を營みて三穂津姫を祭り、地方の守護神と崇め奉れ、さらば領内必ず安穩となるべし、ゆめ疑ふことなかれ、と、手に持った扇を打ちひらげ、三度あふがれたと思ふと、天の女神の姿は見えなくなりました。あまりの不思議に驚いて、殿様は夢からさめました。

X X X

翌日の朝、殿様は家來の者に命じて南の方角を尋ねさせました。一同は谷川を傳つて山奥に上りますと、やがて大きな古木の茂つた狭い谷に行きつきました。小暗いほど茂つて遠方は見えませんが、何だか奥の方が水の落ちるやうな音がするので、勇んで奥へくと進みました。

あ、何といふ美しさでせう。大きな岩の間に、天から流れ落ちるかと思ふほど高い高い空から、大きなきれいな龍がおちてゐるではありませんか。秋の事ですから、岩間の紅葉は錦より美しく、龍水が玉と乱れて飛ぶさまは、繪のやうです。龍壺に湧きかへる水は、白く淡雪のやう、水の響

は遠雷の如くに心氣を震はせます。あ、夢ではなかつたのです。

殿様は大層喜んで、家來に命じて、龍のほとりに美しいお宮を建てさせ、三穂津姫を祀つて人々の安穩を祈りました。それからは、須賀の船には、幸福な年ばかり続いたと申します。

徳川時代には龍王権現といつて、敬つておましたが、明治六年に瀧山神社と改められました。今お宮の附近は石南・つ、じ等の名所で、夏の涼しさ、秋の紅葉も珍らしく、遊覧客の脚を引いてゐます。わけて八朔の祭禮には、ずるぶん遠方からも参詣人があつて、賑やかなお祭が行はれます。

### 二、出征兵士の歌

#### 一、新出伍長

櫻花散る春の末  
「悪きロシヤを懲さずば」

再び過はじかへらじ」と

この歌は日露戦争時、當時山内小学校校長内藤忠雄氏が作歌して児童生徒にうたせしめて志氣をほめましたものである。  
新出伍長一は須賀日露戦争起りや山上村より出征して多くの功をたてた。

かたく誓ひて立ち出でし  
新出伍長のいさをしを  
折木城の激戦に  
瓢箪山の敵壘を  
まつさきかけて進みたる  
人の中にも「新出こそ  
命ずるひまも荒れ狂ひ  
豊榮昇る日の本の  
筒先そろへてうち出す  
亂る、敵を斬りまくり  
高く萬歳萬々歳  
外國までも擧げたるは  
千足の國の武士の  
鑑とせ々に歌はれん、

勇士の中の勇士なる  
聞けやん々音高き  
天王山と目ざしたる  
おして進む折しもあれ  
中隊長は人多き  
見事果さぬ役目をいと  
獅子奮迅の勢で  
日の丸の旗さげつ、  
篠をす弾をくさりぬけ  
砦の上に衝立ちつ、  
先登一の名と響れ  
武勇にはこる細戈の  
鑑とせ々に歌はれん、

後の普長にして  
金鶴敵軍功大坂と  
戦つた七等  
叙せらる

二、坪倉一等卒

櫻花散る春の末  
鉄うちすて、剣をとり  
姓は坪倉名は林蔵  
聞けやん々音高き  
いとも重かる俸令の  
前々、砲音雨と飛ぶ  
真一文字にかけてゆく  
無念と叫びどうと伏す  
血潮胸よりほとばしる  
片手を擧げて「やよ待て」と  
うち招きつ、「君よ君、  
此役目をば果さずでは  
語り終るやかつと吐く  
赤き心は敷島の

勇みたりて立ち出でし  
一等卒のいさをしを  
折木城の激戦に  
役目を帯びて天地も  
彈丸をも何かためらはん  
折しもあれやあな哀れ  
うちめかれしは手か足か  
痛手を押へ氣丈にも  
今しも進む兵卒を  
命は軽し命重し、  
我は死なれど死ぬまじと  
血潮の色にも優りたる  
日本島根の山櫻

坪倉一等卒  
坪倉林蔵のことに  
して日露戦争の  
際山上より出  
戦して折木城の  
戦に俸令となり  
勲章中級功章を  
授けられたる  
八等叙せらる

花にたとへし武士の  
天地の共 窮なき  
皇國の光と残るらん

かみとせ々にかきよきて  
天津日嗣のしらしめす

三、山城軍曹

日本男兒のそが中に  
山城軍曹は我住める  
この山里の人ぞかし  
残る薔にいと詠じつ、  
其の面影は今も尚  
身を大切に國の爲  
祈りしかひもあなうれし  
命を的にもたらして  
勝とはなりぬ そのかみか  
北東 匂の 拵戦 に

武士のかみとうたはる、  
山は縁に 水 清き、  
「花の行方は語らじな  
勇みたけりて立ち出でし  
小さき胸にうかぶなり  
高きいさを立てませ」と  
深く虎穴にわけ入りて  
君が報告に 全軍の  
ものもあやめも朝まだき  
敵を木の葉と散らしたる

山城軍曹一  
山光景のこ  
日露戦争起るや  
志願して山上村  
征伐に上り各地に  
轉戦して功をたて  
功七級勲七等に叙  
せらる

一際目立つ武者振は  
早く歸りて我が爲めに

聞くも勇まし見たかりし  
戦争の話語りませ

軍曹が出征の際村界大入峠にて 紐を撫して歌へる歌に  
散りて行く花の行方は語らじな  
残る薔にあとたのみつ、

四、木山上等兵

激しい戦の 数多き  
御 昌 屯 の 戦 に  
姓は木山 名は房藏  
わりなき友でありました  
勇しいこと 書き残し  
二年の前となりました  
祈ったかひもあらかなし  
先生に聞いて泣きました

中に一際すさまじき  
名譽の戦死をなされたる  
君は我等の 兄上と  
日露戦争はじまりて  
満洲さして立たれたが  
「無事で凱旋なされよ」と  
戦死なされた其の次第  
さてもこの度たふとくも

木山上等兵一  
木山房藏なり  
日露の役に山上村  
より出征して遂に  
名譽の戦死を遂  
ぐ功七級勲八  
等に叙せらる



金鷄魚章さがりしと  
もらひなされし心地して  
それといふのもふだんから  
模範兵士とほめられて  
おくれはとらじいと心掛け  
役目は重い不候に  
彈丸は霰と降る中を  
立つた武者振花よりも  
惜しや飛び来る流丸  
男盛の二十二を  
生きては忠義の人となり  
花は櫻木人は武士  
下し賜ひしこのしるし  
なんでも君にまけまいと  
どうか天からこの歌を

聞いてうれしや兄上が  
思はず萬歳呼びました  
勇氣があつて、勉強で  
戦争に立つては、人よりも  
中隊長の目にとまり  
選出されてけなげにも  
敵の様子を見はりして  
美しかつた其の時に  
胸を貫きむぎくと  
この世の別れと散られたが  
死しては護國の鬼となふ  
手本にせよとかしこくも  
私等も大きくなつたなら  
今から覺悟をしてゐます  
聞いて下されなつかしき

うやまひまつる木山名

たふとびまつる木山名

### 一三 妙見山合戦

松本城主渡邊石見守は、旗旗を朝風になびかせ、威風堂々鳴物そへて、  
軍勢數百と丸塚のあたりに馳せ向けた。  
時は文祿四年春半ば、目ざす妙見城は方一里、東は深谷、西は瀧山の  
大磐石を控へ、南は備中境に高峯を連ね、要害堅固なること此の上ない。  
城主田邊美作守は、小勢なれども荒武者をかり集めて、其の勢はなかな  
かに侮りがたい。  
「小勢なる妙見山の奴等、何程のことやあらん」と、寄手の輩どつととき  
の聲をあけて、先を競うてせまつて見れば、こは不思議、城内はどよめ  
き騒ぐと思ひの外、ひっそりとして物音一つ聞えぬ、少し氣ぬけはした  
なれど、勢あまつて城門めざして、真一文字に進み寄つた。  
城内にては計略巧みな伊田新左衛門

松本城一石見軒下  
石見にあつた  
丸塚一福原村の内  
文祿一太閤寺吉原氏  
要害堅固一まじり  
くせぬこと

計略一はかりごと

「我に茶あり、よし目に物見さく北んずいと、ひそかに城の熱するを待  
つてある。侮り切つた奇手の兵は早や真下にと集つて来た。」

「時はよし、いざ」と下知すれば、かゝつて同意の大石は櫓の上から一時  
に、ごり／＼と落された。不意を打たれた奇手の兵は舞び落ちる無  
数の大石と共に、溪谷へころび落ち、見る間に忽ち屍の山。さては戦略  
か、残念いと歯を喰ひしはつた奇手は、一まづ城へと引き上げて、勢の  
回復を待つこと、した。そして何時かは妙見山の恥辱をす、かんものと、  
将卒はこぞつて腕を練つてみた。

彼に後警の企ありと早くもさつた妙見山城主美作守は、重臣伊田新  
左衛門と一策をめぐらし、ひそかに時期の来るを待つてゐたのであつた。  
明くれば五年の春の花咲く頃、妙見山側は意外にも、かく不和をつ  
くるはお互の不利、ゆなほりしてはいかに」と、松本城へ使者を立てた。  
松本方では去年の此の頃を思ひ、いかにも残念と色々評議をこらしたか  
一まづ和睦することにした。伊田新左衛門手をうつて、につこと笑み  
をもらしつゝ、萬事の手筈をさめた。

城の熱する一と  
の十の十の十の十

後警の企あり  
一策一つのはかり

是政原一石見福原  
の村境にある原

やがて兩軍相つどうた。處は兩城の中央是政原。たちまち一大酒宴は  
開かれた。時の進むにつれて、謠ふものあり、舞ふもあり、大賑。時こ  
そ来れ、と妙見山方、にはかに合圖をみると、かねて頼んだ加勢の伏兵  
多里・生山の鎧武者、衆山坂や家全原から、一度にどつと湧ましく此の  
場をさして攻め立てた。妙見山の此の合圖に驚いた松本方は、あはて、  
身仕度を調べた。

「さては卑怯な妙見山方の謀なりしか、無念なり」とおだんだんだ踏んだが、  
今更致し方がなかつた。たちまち敵軍に取圍まれおの／＼一刀おつとり  
立ち向つては見たが、酒に足憚うばはれて、敢々に敗れて討死する外は  
なかつた。不意を打たれた松本方は、此のたびこそは殆ど全滅した。命  
からがり逃げ歸つたのは、城主渡邊石見守外敷石といふ哀れさであつた。



一三、七色櫨

神奈川村の堤八町、日野川に沿うた櫻並木の堤を下ると、今が花の真盛りで、一本一本にとりつけられた繪灯には、商店會社の名が書き連ねてある。

櫻堤の正面に聳える建物は、明倫小學校の校舎で、その裏手に花ならぬ赤い大櫨が、こんもりと用水路新六井手にかざしてゐる。これが有名な七色櫨である。七色櫨とは春の新芽が萌え出す頃から、夏の半櫨の葉が老成する迄の間に、葉の中に含まれてゐる花色素（アントシアニン）がいろいろに變化して、つき／＼に七色を現はすのでこの名が付けられる。

この櫨は地方では一名蛇櫨とも稱はれ、木膚に傷をつけると、血が流れ出ると昔から言傳へられてゐるが、これは名木を保護する昔の人の深い用意から出たものらしい。この名木をめぐつて、いろいろの傳説が面白く傳へられてゐるが、その中の一つを次に話して見よう。

半ノ江城の役の代官半、江藤右衛門には、年二十一才になる亀之丞といふ一人むすこの美青年があつた。京都から差遣はされて居た奥女中のおみさといふ親しい仲となつた。然し亀之丞には、おみさが従妹に當る豊公側近の寵臣大野修理の娘九重といふ許婚の女があつた。おみさは悲しみの餘り、當時日野川の入江であつたびなが淵に身を投げて死んでしまつた。そしておみさは淵の主の大蛇となつた。其の後地變の結果この淵が一面の田地となつたので、櫨の木に化身した。蛇櫨の名はこれから始つたと傳へられてゐる。

一四、日下開山朝日山

相模は我國の國技で、特に相模本場出雲に近い我が郡は古來相模道が盛んで、名力士を出したことが少くない。就中徳川時代の末頃本郡出身で、大阪相模の日下開山になつた者が二人ある。一人は二部村大字二部出身四代の朝日山で、今一人は溝口町古市出身九代の朝日山である。

寵臣一特別に愛するけらけらい  
しなが淵一神奈川村大字武蔵半ノ江にあり

日下開山一武蔵相模など天下に敵なきもの、傳説の相模にあたるものと見てもよし  
就中一々々の中で

四代朝日山は姓を仲田といひ、少年時代から体力が盛んで腕力殊の外

強く、青竹をしごいて障に用いた位であつたので、地方の官角力では一人として彼を倒すものはなかつた。

身の丈五尺七寸の大男で、普通の家の出入口は始終かゝんでゐた。後、元保年間大坂に上り相撲にはげみ、遂に四代の朝日山四郎右衛門となつた。



勝負の時、郷里の稲荷大明神に祈願し、そのお蔭をもつて勝を得た。そして頭取となつて錦を着て歸郷した時、官に請うて稲荷大明神に正一位を奉り、開願の志を遂げた。

二世一代、一生に一度と云ふこと

今に二部村傳燈寺の門前にある彼の碑と、道路一つを隔てた稲荷様とは、彼の勇名を永久に物語つてゐる様だ。

九代朝日山は、姓は木島氏、幼名を長五郎といひ、彼二平と改め、兄弟五人中の末弟であつた。初め一カと名乗つて地方官角力の雄であつた。或時、大山の下山大権現様に参詣して、我に千人力を授け給へとお祈りして下山しかけた。そして漸く大山原まで歸つた時、急に体力が出来たと見え、足が土にはまつて歸ることが出来かねる様になつた。これはしたりと驚いて、神様千人力はいりませぬ、人に勝てさへすれば結構でございます、何卒左様お聞き届け下さいと祈り直して漸く歸つた。道理で人に負けたことがないと言ひ傳へられてゐる。生れた時、誰いふとなく「大山さんの申し子だ」といふたのと奇しき因縁といはねばならぬ。安政七年二十歳で大阪相撲に加はり、朝日山に弟子入をして四ツ車といひ、更に真鶴と改名した。

身長は五尺五寸位であつたが、体重は三十貫に及び、なか／＼の手取

申し子、神佛に祈つて出来た子

リで、殊に首技、外兵變・はたきとみに妙を得てゐた。當時の力士で、彼のこの得意の水際立つた手に倒されぬものはなかつたといふことである。當時の談に、「角力は陣幕真鶴で」と語られたものである。



性質は温良でしかも氣力衆に秀で、稽古に熱心であつたので、腕が上達し、諸侯にも寵愛された。九代朝日山四郎右衛門となつて、歸國五回、その度毎に盛大な相撲興行をした。

死去したのは三十五歳から四十歳の間で詳かでないが、あまりに相撲上手で強かつたので、人のために毒殺されたのではないかとも言ひ傳へら

れてゐる。

彼の碑は大阪の人十四代朝日山の手によつて古市に建てられてゐるが、美しい師弟の情がうかゞはれて嬉しい。

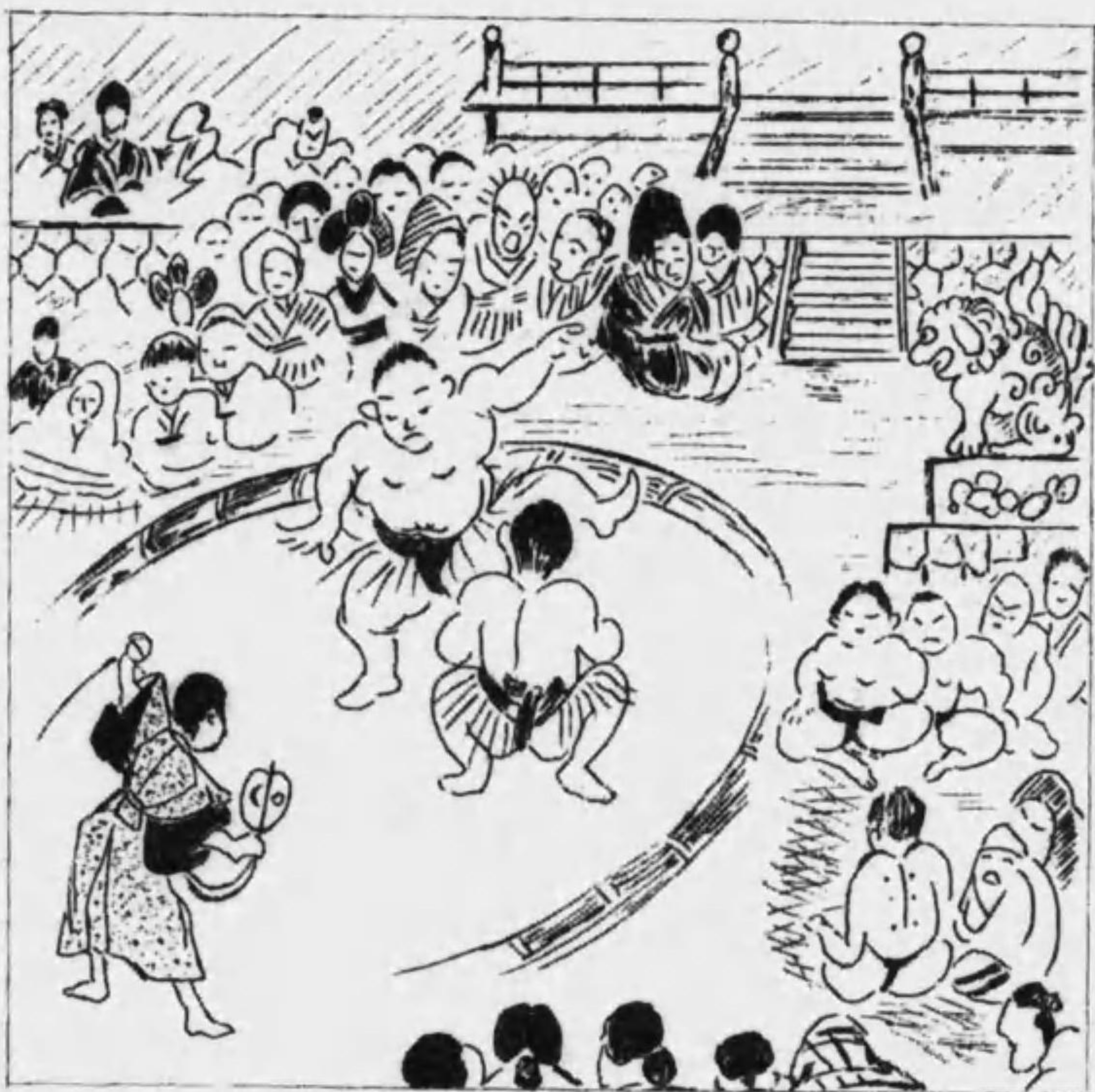
### 一五、宮角力

十一月十四日、天王さんの秋祭だ。幸に天氣もよく、西分遠くからも参詣人があつて、大變に賑やかであつた。夜十時頃までも賑やかに遊んで床についた。

ぐつすり寝こんでゐると、「おい、起きて角力見に行かんかい」と見さんの起す聲に、びつくりして、見さんたりと、角力見に出かけた。お宮に上つて見ると、角力場はもう黒山のやうだ。

人々の間をぬけて前の方へ出て見ると、天王部屋力士が五十人近くも、若者頭や頭取と東西に別れて陣取つてゐる。土俵の上にはおなじみの黒岩が、誰れか知らぬ角力取と取組んでゐる。相かげらず黒岩は、滑稽な

天王部屋、宮角力の地方力士が組織してある相撲の組合である。現在角力場合と組織して維持してゐる。



顔をしたり、しやべ  
 ったりしながら取組  
 む、角力は上手で強  
 い。今日も亦勝った。  
 その中行司が、  
 「東——糸ヶ濱……  
 西——櫻川……」  
 と呼ぶと東西から丈  
 夫さうな男が上つて  
 向ひあつた。隣の角  
 力好きなおぢいさん  
 に聞けば、どちらも  
 一人だとかのことだ。  
 「角力は立つ方」とか  
 いふ言葉があるが、

一人、天正部生は即ちの  
 出陣で十四日の晩に  
 角力の役者かよつて  
 つき出し五合から一人  
 五合までの等組を力  
 量などによつてその  
 中行司にも等組が  
 あるとは上取と云ひ、  
 一人前の腕と云ひ、

自分の居る方から出た櫻川に勝たせたい。行司が美しい力のある聲で、  
 「互に顔を見合せて」とよび、「まだく」といふ中に、「ヤアノ」と  
 いつて立ち上つた。しばらくは立廻つてゐたが、四つに組んで二三回も  
 みあひ、遂に櫻川が背負投をもつて、あざやかに糸ヶ濱を投げつけた。  
 観衆はどつとかちどきをあげた。僕も嬉しかつた。しかし二度目には櫻  
 川がおし出されてしまつた。それでも三番勝負で櫻川の勝となつた。ま  
 だ「ちらし」といふ角力であつた。

次々と百番近い角力がすんで、「ちらしはね」を一人二分同志の亀山と  
 日野川がとつた後に「わり」となつた。黙唱がきれいな聲で、「西——千代  
 ノ花、千代ノ花、東——高の音、高の音」と、順に弱い者から讀上げてか  
 ら、つぎつぎと真鍮な勝負があつた。よく合ふた相手だと仲々面白い。  
 わけて福千島と梅ノ里、千田川と黒岩などの勝負は實に面白かつた。か  
 らだも埜にある角力取のやうに丈夫さうだし、手さばきも男らしい角力  
 であつた。最後に大関にかな小亀山が幣を受取つた。その作法がまため  
 ざましいものであつた。

ちらし——通宜に組  
 合せて角力させき  
 ちいしはね、ちらしの  
 最勝の取組  
 わり！ちらしの高野  
 により、あらかじめ  
 役員で番組をつて  
 つて角力をとらせる  
 こと。

二十三枚の「わり」がすんで、望角力が六七枚あつた後、今日の呼物の五人抜があつた。これはまた實に面白い。飛び込むのも早い。勝負も早い。三四人はぶつつかりに負かしても、五人目頃には大抵また負けてしまふ。見物人は皆手に汗を握つて前へ前へと押し出す。谷嵐や亀山や櫻川なども抜きさうであつたが、黒岩が五人目の谷響を押し出して優勝した。何といつても今日の人氣者は黒岩だ。痛快な男だ。強くて愛嬌者である。もう年が四十だといふが仲々元氣なものだ。荷をかたづけかけてゐる店で、妹たちの土産を買つて家に歸つたのはもう翌日のことで、時計は早や午後二時を過ぎてゐた。僕はあれから何だか支遣と角力が取つて見たくなつて来た。

### 一六、電燈になるまで

光の中に人間の進歩がある。森林の彼方に夕日が落ちて奥闇を夜がせまると直ぐ寝てしまふ。火山や落雪等の自然の火を獲へた僅かな松明の

松明—松脂の多く  
所をさして火を  
しす

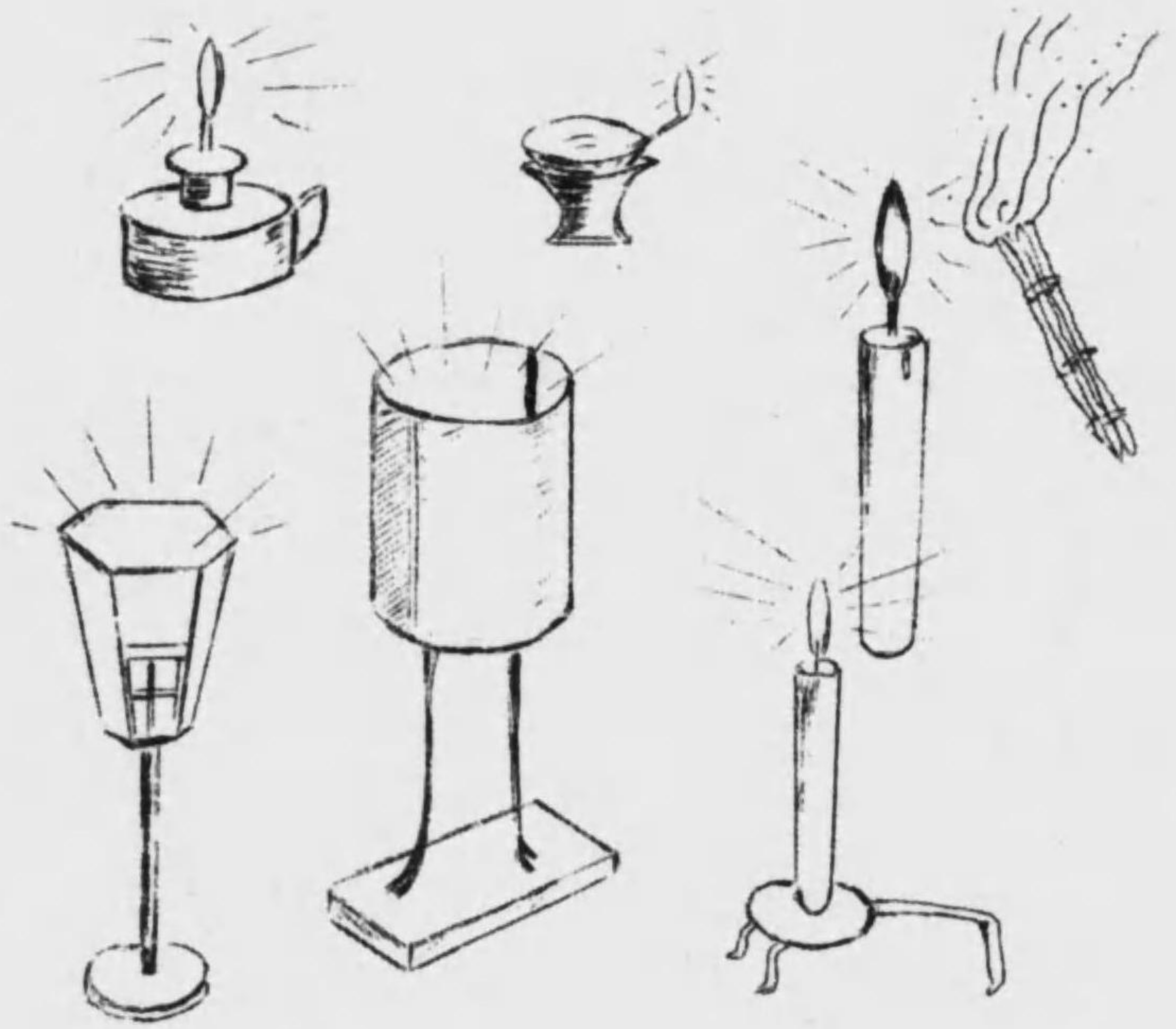
光で夜の住居を照らした太古の世には、人の手によつてどれ程の仕事が爲されたらう。

やがて人の力で發火の方法が試みられた。堅い木と木と強く擦り合せ或は鐵片と石とかち合せて發火した。その火を注意深く枯草とかほくちとかにうつし、しまひにはよく燃える丸太にうつして、燃やし續けたのである。

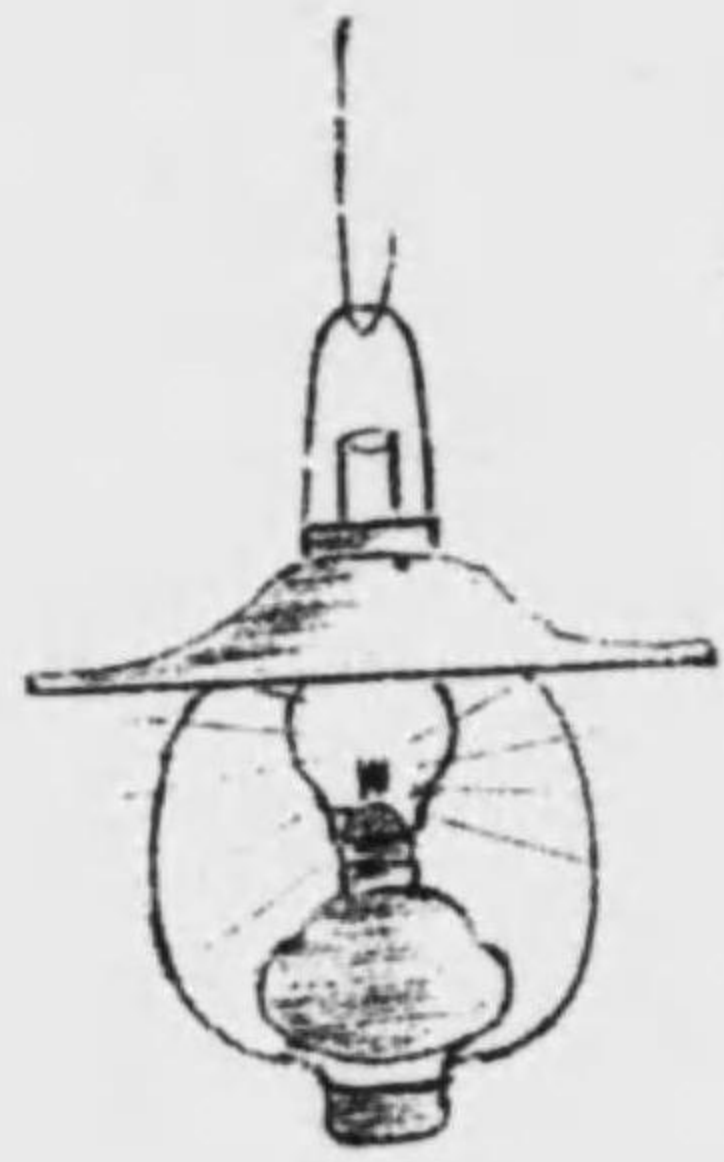
ところがそれは持ち運びが不便であるから、脂肪レバの多い材木を長く細くさいて束ね、その一端に火をつけることにした。次に脂肪をぬつた縄又は木片を束ねて松明とした。木炭線をよつて心にし、それに蠟ろうか脂あぶらをぬつた今日の蠟燭ろうそくのやうなものになつたのは、今から千年位前のことである。この原始的な蠟燭はその後數百年の間世界の各地で用ひられた。

一方動物の脂肪がよく燃えることを發見した。太古の人間はこれをくぼみのある器へとかしこみ、その中にあま、その他の植物のすおを燈心としてひたし、その一端に火をつけた。これがランプの起りで、動物脂は種油となり、石油となり、つい近年まで用ひられて来た。ほやのついた

あま—石ランプ



五〇  
 ずみ分進んだランプは、  
 今から百五十年あまり前  
 ロンドンの醫師アーガン  
 トが發明したのである。  
 もちろんかうした變遷に  
 は、寧く、明く、便利と  
 いかことが條件となつて  
 めたのである。スコット  
 ランドの發明家マードック  
 がランプ以上の照明即ち  
 ガス燈を發明したことは  
 大きなてがらであつた。  
 西洋の大都會ではこの美  
 しい光を争うて點じた。  
 それが今から百二十年あ



を應用し照明の第一はアーク燈で、その光は百のガス燈數百の石油ラン  
 プに匹敵した。しかしこればかり強力を光で、屋内を照すには適しな  
 い。

まり前のことであつた。  
 然し我が日野郡の如き  
 は山間の故でこのガス燈  
 の恩恵には與あからなかつ  
 た。そしてらふそく・ラ  
 ンプの時代を経て一足跳  
 びに電燈の時代となつた  
 のである。

この電氣といふ不思議  
 なもの、正体を捕へたの  
 は、アメリカの學者フラ  
 ンクリンであつた。電氣



その後、アメリカの「發明王」エジソンが日本の竹を取寄せてそれを細くわけて上げ、焼いて炭素線としたものを、ガラス球に入れてその中の空気をぬき、そして電流をこれに通じた。これが今から約五十年前に發明された炭素線電球である。そしてこの炭素線電球は間もなく今日のタンガステン電球に變つて来た。

我が日野邸に於ても明治四十二年（一九〇九年）の發電所が完成し、引續いて大正七年江尾發電所の完成となり、此等發電所から流れる電流は、村々の隅までも行き届いて暗黒の夜を明るく照して居る。

以上説いて来たやうに、私州、らふそく、ランプ、ガス燈、電燈といふ風に、新發明毎に、段々と安全の度を加へ、光明の度を増し、全然煙もすゝも起さず、白晝をおぼむく照明を得るやうになつたのは、全く進んで止むことを知らない人間の知識の賜である。光に接せられた驚くべき苦心努力は、他の種々の方面にも及ぼされて、今や人間生活は益々進めかしくなつて来たのである。

註、發電出力  
五〇〇ワット  
江尾、發電出力  
一、一〇〇ワット

### 一七、元弘の忠臣

今から凡そ六百年前、後醍醐天皇は、逆賊北條高時を亡して、皇權を恢復せんと企て給ひ、敵愾を懼ませられましたが、事志とたがひ、遂に高時のために、恐れ多くも違ひと隠岐の小島に蒙塵（まうじん）あらせられました。

時は元弘二年二月、風塵（かぜじん）は山陰山陽の界に聳（たつ）える四十曲の險坂をこえて、我が日野邸を御遷幸あらせられたのであります。當時四十曲の麓、大要害、小要害には、金持景藤が金持景を率ゐて立籠り、黒坂の要害山には、日野義行一族が據つて、遙かに勤王方に呼應してゐました。南澤が四十曲にかゝり給ふと聞いた兩氏は、喜ば喜んで、奉迎し奉り、しばらく時の到るを待らつ、益々武を練り城を固めてゐました。

お痛はしい隠岐の島の一年も忽ち過ぎ去つて、天皇は勤王の士に扶けられて虎口を遁れ給ひ、再び荒濤をこえて我が伯耆國に着御あらせられ、名和長年に頼られました。やがて船上山に行宮を築め給ふや、日野氏、金持氏は共に行在所を守護し奉り、賊徒々木清高等擊退の功を立てまし

蒙塵、天子の表に  
よつて外にのち、  
風塵、天皇の表  
りになる事  
四十曲、根西村坂井  
原より作州へ越  
す坂道  
南澤、天皇の行所



日野氏は名和一族であつたが、風名和館に馳せ、

到着の武士を記録する任にあたり、馳せ尋ずる諸國の武士を能く安堵せしめました。

金持氏は金持黨二三百を引具して、馳せ向うたが、密かに朝山六郎を通じて、矢撃の策を立て、敵の後陣に控へ、東坂の戦酣なるや、賊の後方を衝いて忽ち潰れせしめました。

日野義行、義泰父子も、名和基長等三十餘人と東坂を守つておましたが、衆寡敵せず、味方危し、と、御前に侍してゐる長年に告げるものがあつた。長年は自告として、基長、義泰等を守つてゐるからには、決して敗れることばあるまい、といったが、果して敵を切り崩してしまつた。功によつて義行は長門権守に任ぜられた。賊が平定すると金持家武は、侍大将として源忠頼に従ひ、六波羅征伐に向つて功があつた。

元弘三年五月二十三日、目出度く京都へ御還幸あらせらるゝや、金持大和守景藤は、御劔を奉持してゐた名和長年と相並んで、錦旗をさし、御車のたに候し、玉体御守護の大任を果した。

建武中興の大業成るや、景藤は武者所衆に任ぜられたが、中興の政急

矢撃はさみうら

衆寡敵せず、敵味方は少く、味方は多し、と

ち破れ、新田義貞が懐良・尊良両親王を奉じて北國に下つた時、共に金ヶ野に立籠り奮戦難に殉じた。  
 日野氏は名如氏の遺族と共に九州に下り、征西將軍宮懐良親王を扶け奉り、終始一貫國事に盡した。

元弘 日野義行朝臣頌歌

- 一 我が日野部の名にし負ふ  
 いさをたへてそのかみの
- 二 部の最中 黒坂の  
 君をむかへて守りけん
- 三 船上山の東 坂  
 隠岐の小端にかへしけん
- 四 我等の郷土つらぬける  
 日本總みかきつ、

日野氏が君に盡しけん  
 雄かしき安徳ばなん  
 要害山をあふれん  
 船上山にたぐへつ、  
 かたく守りて仇濤を  
 武勇のほまれいと高し  
 日の川水のいと清き  
 祖先の徳に酬いなん

頌歌一はめうた

忠臣 金持景藤朝臣頌歌

- 一 嗚呼日の川の水清く  
 我が日野部の中心地
- 二 宍物山下 忠士あり  
 陰陽劃る險坂を
- 三 時は来れり 元弘の  
 あ、蒙塵の御車は
- 四 一死報國この秋と  
 三百餘人ひき共にして
- 五 秋雲忽ち切り拂ひ  
 都の春の朝 東風に
- 六 歌へ我友ほこれ人  
 祖國の正氣紹る身ぞ

大山、山は翠なる  
 山紫木明根雨の里  
 端を負ひたる虎の如  
 死守す要害大要害  
 世は荊蕀と亂れつ、  
 四十曲にか、りけり  
 奮起す我等の金持黨  
 船上山に馳せ向ふ  
 南澤肅々と還幸の  
 錦の御旗さすや誰れ  
 神代古地に生を享け  
 進め忠士を竜鑑にて

郷土讀本 卷一 終

昭和九年二月十五日印刷  
昭和九年二月二十日發行  
(非賣品)  
編輯兼 日野 部 教育會  
發行所 日野 部 教育會  
印刷者 竹 田 勝 信 郎  
京都市九太町通油小路東入

終

